

夢が醒める雪解けを待ち侘びた。

1mm

信じていた約束だった。

叶ってほしい願いだった。

でも。

それらを想いながらも、常に「さよなら」の可能性を、考えていた。

[夢が醒める雪解けを待ち侘びた。]

魔女は、生まれた子どもに、守護魔法をかける。大人になるまで……  
子どもの間だけ有効な、タイムリミット付きの御守りとして。母親として、  
子どもに注ぐ最初の愛情。

それが、魔女の世界での習わしだった。

しかし、その内容に定めは無く。

私が母親にかけられたものは、私を護るものではなく、周囲への呪い  
であった。

「周囲の不幸を助長し続ける」。

母親は妾であった。妾ながら愛されていたが、愛されていたが故に、  
私という命を望まなかった。

私の命に悲嘆し、しかし自ら殺すことも出来ず。私がとうとう生を受

けると、呪いを守護の代わりとし、間もなくして儂くなったという。

守護は、己の魔法ではない。故に、己でコントロールすることは出来ない。

ただただ呪いを振り撒く私を、当然、周囲は疎んだ。そして、「母親にも望まれなかった命。無に返せ」と、早々に言われたのもまた当然のことであった。

それを。

……ただ一人。正妻だけが、守護してくれた。

守護と言っても、正妻のそれは、生まれつき持たされる守護のそれとは異なる為、意志で彼女がかけ続けなければならないものである。正妻が、望んで護ってくれる。しかし同時にそれは、彼女の守護が無ければ正妻以外の者には殺される、ということを表していた。

大人になったら、生まれ持ったの守護魔法は解ける。おとなになったら。呪いは解ける。

——大人になるまで、呪いは振り撒かれ続ける。

だから。

待つよりも、早く無くしてしまった方がいい存在だと。私自身でも、思った。

「家を出ます。

そしたら、私は殺されるのでしょうか？　いない方がいい子どもなのですよ。おかあさま」

「……、」

告げた時。彼女は覚悟していた表情で、しかしそれでも顔を伏せた。生まれた時より変わらない愛情をくれている人。自分を護り続けてくれている人。そんな人だから。

「死なせないわ。貴方が呪縛から解かれるまで」

私は、考えていなかった。呪縛から解かれる日が来るという希望。その可能性、それを待ち続ける選択肢など。

「きっとよ。この花が咲く限り、私が貴方のことを想っていると。どう

か覚えていて、きっと、その間は」

でも。

この人が、信じてくれているなら。私の死を、こんなにも泣きそうな顔で悲しむというのなら。

生きてみようと、望んでみようと、思った。

「ありがとう、おかあさま。

……いってきます」

(……さよなら、)

大人になったら、しあわせに生きられるの？

貴方も、周りも、そうよ。魔女の守護は成人したら消えるの。だから、どうか、生きて。

(はやくおとなになりたい)

(でも)

知っていた。おかあさまは——もう長くない病に侵されているのだと。

\*

雪が降ったらしい。

空気がきんとしていた。外は、音が無い。

ぼんやりと目を開けて、暗い天井を見ていた。家を出た日の夢を見たことに何の意味があるのだろうかと考える。勿論、意味など無いのかもしれないし、——もしかしたら、知らせなのかもしれない、とも。

「どうした」

不意に投げ落とされた声は、低いものだった。自分にとって、とても大事な。

「……何でもないよ。ごめんね」

一緒に家を出てきてくれた子がいる。たった一人、自分のことを見てくれる他人だった子ども。自分と同じように、要らない存在という扱いを受けていた子ども。

「雪が降ったみたい。」

空気が。ね。

笑う。半分は促す意味で、もう半分はからかいの意味で。この子は、体質的なものだから仕方が無いが、多量の水分が苦手だった。案の定顔をしかめる彼に、今度はからかいだけで笑う。いつまで経っても変わらない、それは彼が私へ寄せてくれる想いの証でもあったから。

雪が降る。冬が来る。冬が来ると、細かい時期はばらばらだが、おかあさまがくれた椿が咲く。おかあさまが、私を護ってくれている証として。

だから、彼には言わないが（尤も、悟られていることではあるけれども）、私は冬が好きだった。赤い椿が映える雪が好きだった。

……好きではあったけれど。同時に、冬は、さよならのことをも考える季節だった。

彼に、口癖のように言っていることがある。それは、別れが来た場合のこと。

何故別れのことを考えなければならないかと、彼に説明したことはない。自分のことながら暗い話だから、引き込まずに済むのであればそのままであってほしいと思ったから。

……単に、自分のことを怖がられるかもしれない、という万に一つの可能性を恐れたのかもしれないけれども。

（彼に限って、そんなことは本当に万に一つもありえないのだと、今はもう誇らしく言えるけれども）

（ただ、君と過ごせたはずの幸せな日々を、想っていたかった。）

\*

知らせ、だったのだ。あれは、やっぱり。

唐突だった。

それは、あの夢を見て、次に雪が降った日。

椿は咲かない。今年は、まだ。

咲いたら、あの人の想いが一緒に伝わってきて、とても暖かな気持ちになる。嬉しかった。自分の生を望んでくれる人がいると、離れていても分かるのが。

だから、……期待していた。

そう、彼女の命が長くないと、忘れていたわけではなかったのに。常に、終わりの可能性を考えていたはずなのに。それでも、浅はかに、

(生きたいと、)

(自分でも、思っていたんだなあ、)

\*

自分が外に出られなくて、代わりにあの子にお遣いを頼んだ。雪が降り積もった後だったから、彼は顔を顰めていたけれど。

椿は咲いていなかった。

見送って、部屋に戻り。

そうして、間もなく。

荒々しく現れたのは、黒い色。

見た途端に悟った。彼女が、もう――。

「ゆいさま。」

久々に呼ばれた名。馴染みがもうなくて、まるで自分の名前ではないように感じた。

かしくかれるのは、自分が一応そういう立場だからだろう。最初から望まれていなかったものでも、無いものとされるはずだったものでも。

そっと目を伏せて。

しゃがみこんで、黒に視線の高さを合わせた。合った目は、無感情。

「ごめんね」

咄嗟に出た謝罪は、何に対してのものなのか、自分でもよく分かっていなかったけれど。

ああ。

一度自分で死を決めたことがあったけれど。でも。

(もっと、)

(生きて、いたかったね)

少しだけ、自分に幸せをくれた日々に想いを馳せて。

黒に両手を差し伸べる。

静かにもたらされる死の魔法を知っていた。ゆっくりと包み込まれながら、記憶の中の存在に、思う。

(君がいない時でよかった)

きっと君は、……泣いてくれたから。

最期の最後まで、不幸を振り撒きたくはなかった。

沈む意識に、閉ざされていく瞼が重い。

視界いっぱいには映るのは、赤い赤い、あの花。彼女の守護から解かれた証がぼろぼろと剥がされていく。

……童話のようなめでたしは、やっぱり、なかったね。

「ごめんね。」

さよなら、って、言えなかった。

どうか。

望んだのは、自分がいなくなった世界で、君が幸せになってくれますように。君といつまでの幸せに暮らすことは、叶わなかったから。

なんて、なるはずないと分かっている上での傲慢で。

小さく笑んだのが、君に伝わればいいのに。

(さよなら)

降り止んでいた雪が、また、ひとひらだけ舞った。

\*

2987字

『過去』より。